冷えた鋼塊 (上)

佐木隆三

冷えた鋼塊

上

集英社

冷えた鋼塊　上巻

一九八一年四月一〇日　第一刷印刷
一九八一年四月二五日　第一刷発行

定　価　九八〇円

著　者　佐木隆三

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二・五・一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部　二三〇―六三六一
　　販売部　二三八―二七八一

印刷所　凸版印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1981 R. SAKI, Printed in Japan

0093-772313-3041

目次

第一章　鉄冷え　5
第二章　国際カルテル　40
第三章　響灘　76
第四章　原子力製鉄　120
第五章　課長社宅　164
第六章　労働組合　207
第七章　起業祭　277

装幀

安彦勝博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

冷えた鋼塊　上巻

第一章　鉄冷え

一九七八年十月、北九州市。

このところ連日、はっきりしない天候が続いている。日本製鉄社宅で騒ぎのあった日も、朝は陽が射していたのに、昼すぎから雨になった。

佐藤由佳は、二階ベランダで、洗濯物をとりこんでいた。ベッドで本を読んでいたため、雨に気づくのが遅れた。白い布には、煤塵がくっついている。空中を浮遊していたのが、雨と共に降ってきたのだ。どうせ、洗い直しである。滑りやすいタイルに足を奪われないように、ゆっくり片付けていたら、

「人殺し――」

悲鳴がどこからか聞えてきた。

古くからの社宅街で、犯罪にはほとんど縁がない。なだらかな丘陵の、てっぺん近くに神社があり、その下が所長、副所長ら幹部社宅、そして部長、課長、係長と下がっていく。雛壇みたいだと、他所から来た者は驚くが、保安係詰所などもあって不審者はチェックされ、安心して生活出来る。

「人殺し――。助けてぇ」

悲鳴は女の声で、東のほうから近づく。どうやら川べりの平社員アパートあたりから、逃げて来る気配なのだ。

ただごとではなさそうなので、声のほうへ注意を向けると、全裸の女が駆けている。すぐ後ろから背広の男が、刃物をかざして来るのだった。

「ヒロ……」

とっさに気づかわれたのは、寝室に居る弘人である。幼稚園の年長組だが、カゼ気味で休ませている。震えながら階段を降りたら、ベッドでは穏やかな寝顔で、母親の添い寝を信じきったように、両腕を伸ばしている。弘人が抱いているのは、さきほどあてがった由佳の枕だ。

ほっとして、ドアを外から閉めた。テラスハウス式の、3LDKである。玄関は施錠してあるが、庭に面した居間の窓は、開け放っている。

時ならぬストリーキング——。

そんな好奇心も、なくはない。由佳が窓際へ行ったのは、全裸で駆けていた女がどうなったかを、確めるためであった。

庭のサンダルを突っかけ、東側の垣根に近づこうとしたら、

「じょんだれ！」

罵声がして、人と人のぶつかり合う、激しい息づかいだった。男が罵っているのは、だらしない、身もちが悪いの意で、女への最大の侮辱である。夫婦喧嘩だとしても、追いかける側がかざしていたのは、刃物なのだ。一瞬、迷ったけれども、飛び出して行って、制止出来るものでもない。由佳はひとまず、部屋の中へ引返した。様子しだいで、一一〇番すべきだと思ったのである。

アルミサッシの窓を、後手に閉めかけたところへ、

「助けてください……」

裸の女が飛びこんできた。由佳より少し上で、三十六、七歳といったところか。小柄で白い肌の胸あたり、血だらけになっている。

「あなた、いったい？」
意味のない問いを発しながら、由佳が立ちつくしていると、女は窓を閉め内カギをかけた。そこへ追って来た男が、体当りなのだった。
こちらも小柄で、ずんぐり太って、いくぶん額が禿げかけている。この街のいたるところで見かける、善良そうな〝職工さん〟タイプだが、
「殺しちゃる！」
こんどはこぶしでガラスを叩き、すさまじい形相なのだ。逃げこんだ女は、屋内のどこかへ潜んだらしく、居間にも台所にも居ない。
「何ですか、他人の家に……」
「女房を出せ」
「警察を呼びますよ」
「要らん世話焼くな！」
窓をはさんでのやりとりになったが、男のほうは喚くだけで、新たな手だてでガラスを破る気はないらしい。
「女房を呼んで来ちくれ」
どこか懇願の体で、窓をたたくのも、こぶしから掌にかわっており、ペタッペタッと音がするたびに、朱い掌紋がつく。
「やめなさい」
手を振って、呼びかけるほかない。持っている刃物は、ふつうの菜切包丁だが、男は自らをも傷つけたのか、手から血が流れ出ている。
「……」

急におとなしくなって、見ると庭には制服の男が二人で、包丁にたじろぎながらも、なにごとか呼びかけている。やって来たのは、警察官ではなく、会社の保安係だった。がっしりした中年の大男と、初老の痩せた男で、侵入者が包丁を投げ捨てると同時に、さっと近づいて取り押えた。

「さ、落着いて」

なだめながら、垣根のほうへ連れて行ったので、ようやく由佳はホッとして、寝室へ走った。

まさかと思ったが、女は寝室へ逃げこんで、カギをかけていた。六畳ほどの洋室に、夫婦のベッドを持ちこんだら、それでいっぱいなのだ。

「開けてちょうだい」

不安と憤りで、ついノックも激しくなった。すると弘人が、怪訝そうな顔で、ドアを開けた。思わず抱き上げて、強く頬ずりしていると、不意の侵入者に怒りがこみあげた。

「非常識ね」

声を荒げてライトを点けたら、奥にうずくまった女が、おずおずと立ち上った。

「行きましたか？」

「保安係の人が、連れて行きましたよ」

「すみまっしぇん」

女が近づくと、血の匂いがする。そういえば、負傷しているのだ。

「だいじょうぶ？」

「たいしたこと、なかです」

両腕で乳房のあたり覆いながら、女が廊下を行く。

「そのまま帰るの？」

急いで洗面所へ行き、バスタオルを取って貸した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そっちがバスだから、シャワーを浴びて、傷口を調べなさい。着るものは貸してあげます」
「すみまっしぇん。課長社宅に迷惑かけて……」
何度も頭を下げながら、女は浴室へ消えた。
「どうしたの、おしえて？」
しがみついて息を殺していた弘人が、問いかける。
「あとで話すから、待っててね」
抱いたまま、救急箱を探した。新たに血が噴出する様子ではないから、とりあえずの処置で済むのかもしれない。テレビの下にあるのを見つけ、ついでにスイッチを入れた。
「すぐ来るから、テレビを観てて」
教育テレビにチャンネルを合わせ、浴室へ行こうとしたら、トントン窓ガラスを叩く音がして、初老の保安係だった。
「ご迷惑をかけました。女は、なにしちょります？」
「シャワーを浴びてます」
「なんちゅうアツカマシイ」
「だって手当が要るでしょう」
「それでしたら、診療所へ連れて行きますけん」
言われてみれば、すぐ近くに、製鉄病院附属の診療所がある。
「じゃあ、適当に、着せてあげます」
「ええ、もう、ボロでよかですけ」
「……」
「それから、奥さん」

保安係は、声をひそめた。
「とりあえず、このことは、伏せといてつかっせ」
そういえば、パトカーの音がしていたが、遠ざかったようである。すべて保安係で、処理するのだろうか。
「分りました」
頷いて浴室のほうへ行ってみると、シャワーを使う気配はなく、ただ女の嗚咽する声が、洩れてくるのだった。

「まあ、まあ。ヒロちゃんも、たまがったじゃろう。選りに選って、この家に逃げこまんでもええのにねえ」
姑のウメは、何度となく、繰返す。
「何を考えちょるのかしらんが、この頃の人には、あきれてしまうバイ」
由佳は、電話をかけたことを、後悔しはじめていた。騒ぎが収まって、一安心したものの、あらためて点検すると、家の中のあちこちに血痕がある。保安係は、なんとかすると言ったが、会社から人が来るのを、待っても居られない。弘人の面倒を見てもらいながら、自分で掃除することにして、夫の実家へ電話したのだ。
「けっきょく、あれじゃろ、女が浮気しちょった？」
「さあ、詳しいことは……」
「なんちかんち、現場を押えられたとじゃろ。そうでなけらにゃ、素っ裸で逃げたりはせんがね」
うんざりしながら、由佳は、カーペット専用のクリーナーで、床を拭き続けた。弘人に添い寝で居てくれればいいものを、掃除を手伝うと称して、離れないのである。

「それで亭主は、出張帰り？」
「なんだか、そんな話でしたけど」
「むごい話じゃねぇ。その間に女房が、男を引っ張りこんじょる」
いちおうの経過を報告に来た保安係の主任によれば、刃物をふりかざしていた夫は、自動車工場に派遣されていた。日本製鉄では、不況による余剰人員を、研修の名目で自動車会社に、派遣している。生産現場で、期間工や季節工に混じって、流れ作業に配置されるのだが、およそ五ヵ月間の長期出張になる。派遣先から帰ってくるのは、まだ二ヵ月先だけれども、途中で休暇をとることは認められている。夫はひょっこり、事前の連絡なしに、帰って来たらしい。
「なんちゅうても、製鉄所とか炭坑は、夜も昼もない仕事じゃけんねぇ。男が夜勤に出とるあいだに、女がどげんこげんちゅう話は、昔から聞かんこともなかった。それが今じゃあ、パートやらなんやらで、女が外へ出ることがあたりまえになって、あっちへ行ってもこっちへ行っても、嫌らしか話じゃもん」
日頃の姑は、この家へ来ると、おしゃべりを控えるほうだが、騒ぎの現場とあって、つい興奮してしまうらしい。
「それで、思い出した。昔の炭坑じゃ、ものすごうきびしかったバイ」
六十五歳のウメは、筑豊の出身である。炭坑長屋に生まれて、小学生の頃には、弟をおぶって坑内へ入っている。母親が地底で働いているから、授乳に連れて行くのだ。
「ウチら縄で縛られて、木から吊るされた女を、よう見かけたもんよ。通りかかった者は、石をぶっつける」
「なぜですか？」
「間男したけんよ。昔は姦通罪があったバッテン、炭坑じゃ裁判なんち悠長なことはせん。パッと捕まえて、さらしものにするタイ」

「夫が……」
「労務係の仕事よ。姦通を野放しにしちょると、男が安心して働けんでしょうがい」
由佳は、背筋が冷たくなった。これは私刑(リンチ)ではないか。
「ごめんごめん。由佳さんに、こげな話ばすると、憲治に叱られる」
「いいえ」
「しょんのなかタイ、憲治がなんぼ東大卒というても、父親は職工で、母親は炭坑者じゃけん、隠しようのなか」
ウメが首をすくめていると、電話が鳴った。
「構内電話のごたるね」
「はい」
玄関に二台並んでいる電話機の、黒いほうを取ると、開発部長の相馬だった。
「たいへんでしたね、由佳さん」
「はあ」
「いま保安係から連絡を受けたが、ともかくケガがなくてよかった」
「そのことでしたら、ご心配なく」
「いやいや、冷汗をかきました。佐藤君の留守中に万一のことがあったら、私の責任だし……。なによりも、父上に済まない」
「だいじょうぶですから」
「じゃあ、常務には報告しませんよ。後で家内をやりますから」
「いいえ、そんな」
「それから、外部の問合せその他には、応じないでほしいとのことです」

「承知いたしました」
電話を切った途端に、立暗みがした。あのあと働きづめなのが、いけなかったのだ。由佳は、ちょっとの間でいいから、横になろうと思った。さすがに姑も、心配そうな表情で、覗きこんでいる。
そこへこんどは、チャイムだった。部長がさっそく、夫人を寄越したのだろうか。こういうのが有難迷惑……とドアを開けたら、顔見知りの新聞記者が、立っているのだった。
「奥さん、久しぶりです」
西部本社で鉄鋼担当の、古賀という記者だった。外は本降りになったらしく、肩のあたりだいぶ濡れている。
「主人でしたら、出張です」
「存じてます、アメリカでしょ」
ニッと白い歯を見せ、姑にも会釈した。
「留守中に、災難でしたね」
「……」
「ちょっと騒ぎの様子を、聞かせてくれませんか」
「なんのことでしょう?」
さっそくの取材だが、むろん拒否するつもりで、呼吸を整え目を閉じたら、女が裸で逆さ吊りになっている場面が、浮びあがった。
新聞記者の古賀は、胃でも患っているのか、痩身で顔色も冴えない。しかし表情に陰険さはなく、くるくる動く目は、どこか愛嬌がある。
「なんでも刃物の亭主は、自動車工場への、派遣社員というじゃありませんか」

由佳は玄関先で、当惑している。昼間の騒ぎについて口外しないように、夫の上司から注意されたばかりだった。それでなくても、思わぬ飛ばっちりで、血痕の始末などさせられている。
「せっかくですが、主人も留守ですし、私から何も申しあげることはありません」
「さっそくの、鉄のカーテン？」
ショルダーバッグを、揺するようにして、三十代半ばの記者は、首をかしげた。
「製鉄治外法権ですな」
「えっ」
「たとえば製鉄所の構内で火災が発生しても、自分とこの消防隊で処理して、市の消防自動車は門前でシャットアウト。あるいは死亡災害が発生しても、警察の現場検証さえ迷惑がる。社宅における傷害事件も、同様に処理するわけですな」
「そんなふうにおっしゃられても、困りますわ」
なんとか穏やかに、引き取ってもらいたい。由佳は精一杯の微笑で、応対した。
「私が何も申しあげたくないだけです」
「そこを敢えて聞きたいわけでしてな。パトカーが出動しながら、ありふれた夫婦喧嘩といわれて、あっさり帰ったのも、不明朗じゃありませんか」
「……」
「被害者は、ずいぶん血を流していたというし、かなりの傷でしょ？」
そんなことはない、胸のあたりに擦過傷で、由佳のワンピースを借りて診療所へ行った女は、簡単な手当で帰ったという。むしろ追ったほうが、自らを傷つけたらしい。だがそれを話せば、取材に応じることになる。由佳が唇をかんでいると、
「あんた、なんの権利があって、そげなひちこい質問ばすっとね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com